

「諸人之を仰ぐこと北斗泰山」

畿内を制圧し、全国を睨んだ長慶が永禄三年（一五六〇）に本拠としたのが、河内の飯盛城（大阪府大東市・四條畷市）でした。飯盛山に登ると、なぜこの城を長慶が居城としたかがよく分かります。現在、「飯盛山史蹟碑」が建つ場所からは、大阪や堺の市街のみならず、将軍義輝がいた京都方面を遙かに見下ろすことができます。

近年の研究で、長慶がこの地を、しかも山城を居城に選んだのは、領国の人々から「仰ぎ見られる」とことで権威を誇示したとの指摘があります。将軍義輝が肉眼で見たかはともかく、幕府の使者が飯盛城を訪れる際に見上げなければならぬ状況をつくり、両者の力関係を示す意図があつたのかもしれません。

さらに言えば、飯盛城の特徴は多くの石垣が用いられた点にあります。今に残る石垣は、ほとんどが京都側である北東にあります。これも、京都方面から石垣を望見させ、飯盛城の威容を見せつけることを意図した可能性があるでしょう。信長の安土城は、壯麗な天主を上げるなどして、従来の「守る城」から「見せる城」へと意識を変換した点で革新的とされる

ます。しかし長慶は、飯盛城すでに「見せる城」を実現していたのです。

ところが――飯盛城に本拠を移した四年後の永禄七年（一五六四）、長慶は四十三歳の若さで病死しました。長慶は唯一の嫡子・義興を前年に亡くしており（享年二十二）、三好家は後継者問題で衰退します。奇しくも、この点も信長亡き後の織田家に似ています。

とはいっても、三好長慶が戦国時代において大きな役割を果たしたことは疑いようがありません。長慶は権力や軍事力を振りかざすだけでなく、「足利将軍家が絶対的なトップである」という当時の常識に疑問を投げかけました。そんな長慶という革命の先駆者がいたからこそ、信長が続き、さらには秀吉、家康とつながっていくのです。

「諸人之を仰ぐこと北斗泰山」

長慶は自身の三回忌において、そう讀えられました。誰もが北極星や中国の名山・泰山を仰ぎ見るよう彼を尊敬した、という意味です。その中でも長慶を最も尊敬したのが、長慶と同じ年に生まれ、南宗寺で修行し、長慶の菩提寺・大徳寺聚光院を自らの墓所とした茶聖・千利休であったでしょう。三好長慶という信長に先駆けた男がいたことに、今こそ目を向けるべきではないでしょうか。

④

信長に先駆けた男…

日本の統治者と呼ばれた 三好長慶の実像

十八世紀前半、オランダで発行された「歴史地図帳」が記載する

日本の統治者の変遷には、足利將軍と織田信長の間に「三好殿」とある。

すなわち、三好長慶であった。管領細川晴元の下で力を蓄え、十三方国をも支配し、主はおろか將軍をも凌ぐ権威を誇った。その先進的な政策の数々は、まさに信長の先駆けと呼ぶに相応しい。「諸人之を仰ぐこと北斗泰山」と称され、河内飯盛城から天下を望んだ長慶の、知られざる実像と魅力とは。

天野忠幸

イラスト・諫訪原寛寛
・関西大学非常勤講師

飯盛城址から城下を望む（写真：近戸秀大）

天野忠幸○昭和51年（1976）、兵庫県生まれ。大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程修了。博士（文学）。現在、関西大学非常勤講師を務める。著書に「戦国期三好政権の研究」（清文堂出版）、「三好長慶」（ミネルヴァ書房）、今谷明氏との共同監修に「三好長慶」（宮帶出版社）、共編著に「戦国・織豊期の西国社会」（日本史史料研究会）など。

※本記事は月刊「歴史街道」2015年4月号に掲載されたものです。

発行日：平成27年3月末 発行者：株式会社 PHP研究所



18世紀のオランダで発行された「歴史地図帳」の挿図「日本の統治者の変遷」(地図帳の上部中央、大阪城天守閣蔵)。下から順に戦国時代の統治者の名が記されており、「MIOXINDONO(三好殿)」の名が見える(左図参照)

細川家を惑わす政長を除けと諫言し、あくまでも政長を庇うならば晴元自身を討つこともやむなし、という態度をとったのです。周囲の無用な反発を避けるためであり、長慶一流の政治センスが見て取れます。

そして、長慶は晴元に圧勝し京都に進軍すると、その座に取つて代わったのです。

天下人への「成功モデル」

その後も長慶は躍進を続け、政治の中心である首都京都を支配し、「天下人」と呼んで差支え無いほどの隆盛を極めていきます。

その足跡を辿ると、いくつもの点で織田信長に先駆ける存在であったことが窺えます。

信長といえば、十五代将軍・足利義昭を追放して、自ら京都を支配し、室町幕府の幕を引いた人物として知られます。しかし、足利将军を擁することなく、初めて幕府の本拠地である京都を自ら支配した男こそ、長慶だつたのです。

細川晴元を退け、入京を果たした長慶に強烈に反発したのが、十二代将軍・足利義輝でした。両者の争いは約四年間に及びますが、天文二十二年(1553)に長慶が勝利して、義輝を五年間ほど近江朽木(滋賀県高島市)に追

となつたのが、天文十八年(1549)の江戸の戦いです。当時、すでに摂津に根を張り、力を蓄えていた長慶は、晴元の側近となつて一大事ですが、これも義輝ではなく、長慶こそが眞の実力者であるという世間の風潮、空氣を受けてのものでしょう。

永禄年間になると、長慶は越前の朝倉氏や伊勢の北畠氏、また中国の毛利氏などと、各方面で鎬迫り合いを始めます。三好氏の全盛期の勢力範囲は、阿波・讃岐・淡路・摂津・山城・河内・和泉・大和・丹波の九ヵ国と、伊予・播磨・若狭・丹後の四ヵ国の一部に及びました。これは、武田氏や上杉氏、毛利氏を上回る規模です。

かくして長慶は幕府という従来の体制を乗り越えて、「三好政権」を築くに至ります。この点から長慶は、「日本の統治者」「天下人(実態としては畿内を治める中央政権)」と捉えられたのでしょう。なお、後の信長も義昭を追放すると天皇と相談して天正に改元し、「織田政権」の成立を目指します。

長慶も信長も改元を利用し、將軍に代わる首都の支配者であることを全国に知らしめ、畿内から各地へ領国拡大に励みます。では、なぜ長慶と信長は日本全国へと目を向けることができたのでしょうか――。それ

については、経済基盤を抜きにしては語れませんが、この点でも長慶は、大きな視野の政策を行なっています。

当時、関西圏の大名にとって、大坂湾を支配して流通拠点を押さえることは至上命題でした。その中で長慶は、独自のルートを確立しています。

細川晴元を退け、入京を果たした長慶に強烈に反発したのが、十二代将軍・足利義輝でした。両者の争いは約四年間に及びますが、天文二十二年(1553)に長慶が勝利して、義輝を五年間ほど近江朽木(滋賀県高島市)に追

返すうちに長慶は、「もはや將軍家に統治能力はない」と見限ったのです。

また、天皇、公家や寺社、さらには畿内の都市や村々が長慶を支持したこと、「自らの手で畿内を治める」決意を固める要因となりました。將軍義輝を追放していた時のことでは、もちろん長慶とて、当初から幕府は不要といふ革命的な考え方を抱いたのです。

しかしながら、義輝は度々それを勝手に破棄し、長慶の暗殺を計画しました。そんなことを繰り返すうちに長慶は、「もはや將軍家に統治能力はない」と見限ったのです。

ここで、長慶が義輝に代わる足利一族を擁立せずに戦い、將軍を戴かない形で畿内を治めた点に注目しなければなりません。それでは、將軍と敵対した勢力も、「幕府」という旧来の秩序を否定する意志はなく、必ず別の足利一族を立てて戦つており、後には織田信長や毛利輝元も足利義昭を擁します。それが常識だったのです。

放します。

ここでの、長慶が義輝に代わる足利一族を擁立せずに戦い、將軍を戴かない形で畿内を治めた点に注目しなければなりません。それでは、將軍と敵対した勢力も、「幕府」という旧来の秩序を否定する意志はなく、必ず別の足利一族を立てて戦つており、後には織田信長や毛利輝元も足利義昭を擁します。それが常識だったのです。

しかし長慶は、「もはや足利將軍家は必要な干戈を交えている間、幕臣にも「長慶と争うべきではない」と唱える者もあり、長慶もそれに応える形でたびたび義輝と和睦しています。ところが、義輝は度々それを勝手に破棄し、長慶の暗殺を計画しました。そんなことを繰り返すうちに長慶は、「もはや將軍家に統治能力はない」と見限ったのです。

また、天皇、公家や寺社、さらには畿内の都市や村々が長慶を支持したこと、「自らの手で畿内を治める」決意を固める要因となりました。將軍義輝を追放していた時のことでは、もちろん長慶とて、当初から幕府は不要といふ革命的な考え方を抱いたのです。

しかしながら、義輝は度々それを勝手に破棄し、長慶の暗殺を計画しました。そんなことを繰り返すうちに長慶は、「もはや將軍家に統治能力はない」と見限ったのです。

ここで、長慶が義輝に代わる足利一族を擁立せずに戦い、將軍を戴かない形で畿内を治めた点に注目しなければなりません。それでは、將軍と敵対した勢力も、「幕府」という旧来の秩序を否定する意志はなく、必ず別の足利一族を立てて戦つており、後には織田信長や毛利輝元も足利義昭を擁します。それが常識だったのです。



三好長慶像(「大日本六十余将」歌川芳虎筆、徳島県立博物館蔵)

信長の前の「日本の統治者」

「DAYRO(内裏)

— CUBO(公方)足利将軍

— NABUNANGA(信長)

— DAIFUSAMA(内府様)家康

(羽柴太閤様)秀吉

— FANDEYORI(秀頼)

— NABUNANGA(信長)…

— DAIFUSAMA(内府様)家康

江戸時代は、国交のあったオランダ人でも

日本国内を自由に往来することは禁じられて

いたので、長崎の出島で幕府の役人から日本

の歴史を聞いたのでしょう。少なくとも、オ

ランダ人と接していた役人は、信長の前に長

慶という「日本の統治者」がいたと認識してい

たのです。しかし、江戸時代中期に、主への

忠義を重んじる儒学が浸透すると、主君であ

る足利将軍や細川氏と対立した長慶は、「世を

乱した輩」とマイナスに評価され、近年に至つ

たのでしよう。

しかし、それは長慶の真実の姿でしょうか。

長慶は実際には久秀をうまく使いこなし、下剋上を許していません。また、幕府の滅亡から統一政権の成立に至る過程は、「信長—秀吉—家康」のラインで語られてきましたが、私は、「長慶—信長」のつながりこそ、注目すべきだと考えています。

なぜなら長慶は、「信長に先駆けた男」に他ならないからです。

ひとつ、興味深い史料を紹介しましょう。十八世紀前半、オランダで発行された「歴史地図帳」という百科事典の挿絵「日本の統治者の変遷」には、次のように記されています。

父の仇・細川晴元との闘い

では、三好長慶は戦国時代をどのように生き、どんな点で「信長に先駆けた」といえるのでしょうか。その真実の人物像と魅力を探つ



三好長慶像
(南宗寺蔵、写真提供:堺市博物館)

て享禄五年(一五三二)、「一向一揆」と手を組み、元長を「しきぎ」者にしました。この時、弱冠十一歳の長慶は、堺から阿波に退去し、危うく難を逃れています。

長慶にとつて晴元は、「父の仇」となりました。では、早急に仇討ちを図ったかといえは、そうではありません。翌年には、元長を討た一向一揆が勢力を伸ばし、晴元自身にも抑えきれなくなると、長慶は両者の和睦を斡旋して、晴元のもとに帰参するのです。

現代の我々の感覚では、長慶の行動は理解しにくいかもしれません。しかしながら、当時の主従関係は、あくまで「家」と「家」のつながりです。すなわち、晴元と元長の間に諍いがあつても、それは個人的な事情に過ぎません。二人の間に何があるうと、長慶にとつては細川氏が主家であり、晴元が主君であることに変わりはなく、長慶が晴元を討てば、それは「主殺し」に他ならないのです。もちろん長慶は、いつかは晴元を超えてやろうという決意を固めていたでしょうが、その思いをひとまずは胸に秘め、晴元に再び仕えたのです。

長慶は晴元の手足となり、主家の畿内支配を大いに助けました。そして、十五年近くも雌伏の時を過ごしながら、主君を凌駕する機会を窺い続けたのです。ターニングポイント



「住吉祭礼図屏風」(堺市博物館蔵)。長慶は商業都市・堺を掌握することで経済を活性化させた

三好長慶の飯盛城と大東市を歩く

戦国時代に頭角を顯わし、畿内の実権を握った三好長慶。彼が全盛期時代の永禄二年（一五六〇）に居城と定めたのが、河内の飯盛城である。東高野街道が走る交通の要衝に築かれた山城で、城跡には当時の石垣、郭などが残り、「天下」に霸を唱えた長慶の雄図を感じることができる。



長慶は戦国時代初の天下人であるとともに連歌や茶を好む文化人で、多くの方々に英雄視されている。JR野崎駅や四条駅からハイキング道を経て一時間程度でお越し頂ける大東市の観光スポットです。皆さんもぜひ飯盛城址にお越し頂き、天下人気分を味わってください。



三好長慶と飯盛城

大東市長 東坂浩一

大阪	北新地	天王寺
JR環状線6分	JR東西線5分	JR環状線13分
京橋	JR学研都市線15分	JR東西線5分
野崎	徒歩約1時間	JR東西線5分
飯盛山山頂(飯盛城址)		

